石器の種類(後期旧石器時代と縄文時代草創期)

後期旧石器時代(40,000年~約15,000年前)の人々は土器をもたず、石器や骨角器と木器などを利用していました。この時代の石器は「切る」「削る」ための道具として、台形様石器・意味などを表現を表現して、台形様石器・高部磨製石斧・ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器・細石刃があり、このうちの槍先形をなす「尖頭器」は土器が出現する前後の時期に最も利用されたものです。古い段階は小形のものが多く、獣を突き刺す槍先以外にも側縁をナイフのように用いる道具であったと考えられています。

縄文時代草創期(約15,000年~11,000年前)になると土器の使用が始まり、石器の種類も増えます。尖頭器は長大なものが加わり、将猟用の有舌尖頭器(槍先)・石鏃(やじり)といった形態が出現したほか、「切る」・「削る」・「掘る」・「孔を開ける」といった、用途に応じた影器・掻器・削器・打製石斧・有溝砥石・石錐がみられるようになりました。ただし調理具の石皿や蔵き石といった礫石器はまだ目立たず、これらが一気に増えるのは縄文時代早期以降になります。

川向東貝津遺跡から出土する石器には、比較的近くで産出する 素ようかがが、りゅうもんがな 凝灰岩・流紋岩などが風化して白色にみえる石材や、安山岩などが多 く用いられているほか、地域間の交流を示す遠隔地からの搬入品(長 野県産の黒曜石など)が含まれています。



川向東貝津遺跡の存続期間

調査機関

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 の 24

HP http://www.maibun.com

愛知県埋蔵文化財センター

電話(0567) 67-4163 【調査課】

Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi maibun

調 杳 支 援 安西丁業 株式会社

かりますでがしがいっています。 2016年7月23日(土) 川向東貝津遺跡 地元説明会資料

調査の概要

加向東貝津遺跡は、標高約375mを測る境川(豊川の支流)右岸の河岸段丘面上にあります。調査区周辺に残る石垣は近世末から明治時代に拓かれた棚田の名残で、その後は植林によるスギ林として利用されてきました。

発掘調査は国土交通省の設楽ダム事業にともなうものです。昨年度も調査を実施し、縄文時代中期の竪穴建物 4 棟のほか、縄文時代後期の竪穴建物 2 棟、集石土坑多数を確認しています。昨年度の調査時において、さらに下層に**後期旧石器時代と縄文時代草創期**の遺物を出土する層位を確認したため、その分布範囲 810㎡を今年度に繰り越して、5 月下旬から発掘調査をおこなってきました。

その結果、調査区中央を東西方向に走る境川の旧河道とみられる礫群の北西側と南側で、それぞれ石器群の集中地点を確認するにいたりました。このうち、北西側の石器群については後期旧石器時代のものから縄文時代後〜晩期のものまで混在することがわかりました。いっぽう、南側の石器群については、上層で縄文時代草創期、下層で後期旧石器時代の石器群がおおむね層位的に分かれて出土しています。



